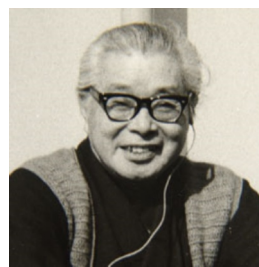


親鸞さま、なぜお念仏なの？ - 出会おう、語ろう、今ここで -

念仏生活を妙好人に学ぶ(5)

木村無相さんから
学んだこと



藤谷純子

無相さんが自分のことを書かれているのによれば、「私は本籍は福岡県で、父は土方の親方で、育ちは朝鮮・満州、学校は神戸の工業学校の建築科出身ですが、卒業した大正十三年二十歳の秋に、あることを機に自己内面の醜さに驚いて、「ああ、この煩惱を断じて悟りが開きたい」と思い立ったのであります」と記されています。昭和八年六月二十九才の時、求道十年を志して日本に帰り、それから四国遍路をし、愛媛県の真言宗の寺内にある真言宗

学院にて「即身成仏」の行学に励むも落第し、浄土真宗のご縁をいただいて聞法するも、「ああ、信心獲得はとてもだめな自分だ。身につけているものは二十才以来問題でならない煩惱だけだ。自分はまったくのドロ凡夫である。ただ煩惱の身にナゼかお念仏が離れぬだけで、とても求道とかのガラでない。今後は煩惱の身のままに在家生活をするほかはない」と真宗の寺を出るも、それから三十三年の間に、真言宗と真宗を二往復もしたという。そして今「いよいよ煩惱の身になんとしてもナムアミダブツ様が離れておくれぬだけの私なのであります」と記されています。

たのでした。その最後のお言葉というのは「このままだ、このままのおたすけだ、ただお念仏一つだ、ナムアミダ仏。このままだ、このままだこのままだ、このままだ——南無阿彌陀仏南無阿彌陀仏」今回は、無相さんの、生成仏の正因である信心をひとすじに求められた尊い歩みを、有り難く学ばせていただきました。

そしてもう一つ、今回のビデオで金光アナウンサーが紹介して下さった無相さんの詩

ぼんのうよ——
わたしが わるいのだ
ぼんのうは
わたしの いのまま
ぼんのうは
わたしの おもいまま
ぼんのうよ——
わたしが わるいのだ

二十才頃から 煩惱を目的にしてきたが、いや煩惱が悪いんじゃない。煩惱を動かしているわしが悪いんだと思うようになった。私いうもんが何かわからなかった。

私という人間の本性・自性というものは、わが身がわいという一点張り、ガリガリの自利ばかり。だから、わが身に都合いい人は可愛がり、都合悪い人は腹立てて取りのける。この根本煩惱・根本無明が、ひどくえげつなく見えてきた。助からんはずや、底にあるのが我愛・我執。「極重悪人唯称仏」、悪人までは思いうけど、極重悪人はオーバー過ぎると思ってたが、なるほどその通りじゃわい。

久遠劫来、三世ぶつ通しの迷いの根本のここに、

「我が名を称えよ」の「称我名字」の本願がかかっている。「ただ念仏して弥陀に助けられよ」の本願は、極重悪人にかかっている。仏法キライ、念仏キライ、かつこうだけの私を底の底まで見抜ききって、ここにかけてられている本願じゃった。「ただ念仏せよ」の仰せのまま、折にふれ思い浮かぶまま、口にあらわされてくださるままに、発音念仏、九官鳥のごとく念仏するだけ。

ひろくもの
わがこころ
貝のごとく
ふと閉じぬ

このかなしみを
ひろくもの
ただねんぶつ
ほかはなく
ただねんぶつ
ほかはなく——

親鸞聖人のご生涯(2)

藤谷知道

懺悔と讃嘆の聖人

仏道を歩めば歩むほど、「悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、… 恥ずべし、傷むべし」と深く懺悔されていた聖人。自分の罪業の深重なることを知らされれば知らされるほど、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」と、如来の御恩を感謝されていった聖人。

そんな聖人に、私たちはよくぞ出遇えさせていただけたなあと、感謝せずにおれませんが、それにしても、どうしてそのような美しき心の聖人がお生まれになられたのでしょうか。

世俗化と観念化

聖人は、人々が塗炭の苦しみを強いられていた「末法の世」にお生まれになりました。

また、幼くして母を亡くし九歳で出家することになりました。

聖人が出家して学ぶことになった延暦寺は伝教大師最澄によって延暦七年（七八八年）に開かれましたが、それから四百年、聖人が出家した頃の延暦寺は、国家（朝廷）を守護する「国家宗教」として、また人々を祈祷によって災難から守る「呪術宗教」として、上流階級の人々の支持を受けていました。いつしか僧の身分までもが生まれた門閥で決まるほど世俗化し、また世俗権力に負けぬほどの僧兵をもつことになっていました。

その一方で「煩惱即菩提」「生死即涅槃」を説く天台本覚思想が日本独自の仏教思想として生み出されていたのでした。このように、聖人が学んだ頃の比叡山は、一方では限りなく墮落（世俗化）しながらも、他方では観念的ではあるが純粹に仏道を求める青年僧が生まれ出てくる、そんなお山でした。

後世を祈る

ところで、聖人は9歳〜29歳までの20年間、何を学んでいたのかよく分かっています。ただ、聖人の妻・恵信尼のお手紙には、聖人が「堂僧」をつとめていたと書かれています。堂僧とは、常行三昧堂で、90日間にわたって、念仏を唱えながら阿弥陀如来の周りを歩き続け、ついに阿弥陀如来と極楽浄土を観想する行をおこなう僧です。

また恵信尼のお手紙には、六角堂参籠にこめられた願いを「山を出でて、六角堂に百日こもらせ給いて、後世を祈らせ給いけるに…」と書かれています。「後世」とは、「現世」（今生）を終えた後の「世」、つまり死後の世界のことで、叡山時代の親鸞聖人は、自身の、あるいは亡き母たちの「後世」での極楽往生を祈っていたようです。

行ずれば得られぬ

ところが、堂僧として常行三昧という荒行を行っても「後世」の助かることに確信がもてませんでした。何故でしょうか？

実は、比叡の山で説かれていた極楽浄土への往生は、『観無量寿経』に説かれているように、定善十三観を行じて阿弥陀仏やその浄土を観想できる者か、あるいは、散善を行じて功德を積みこまざる者だけが、阿弥陀仏の来迎にあずかるという、極めて困難なことだったのでした。

阿弥陀仏の浄土は定善、散善ができる、特別な者しか往けない世界なのか？

定善十三観というが、それは常行三昧のような非日常的な意識の中での幻視でないのか？

そもそも阿弥陀仏は、末法の世を生きる穢悪の凡夫に、そんな難しい行を要求しているのか？

もし、私に助かるということがあるとするなら、この私のみで助かるほかにないのではないのか？

六角堂参籠へ

比叡のお山で学び始めてはや20年、聖人は29歳になりました。追い詰められた親鸞聖人は聖徳太子の建立と伝えられていた六角堂での百日の参籠を決意しました。

それというのも、19歳の時、法隆寺に遊学した足で磯長（現・大阪府太子町）の聖徳太子の霊廟へ参詣したおり、そこで「汝命根応十余歳」（汝に与えられている命はあと十年ばかりである）「命終速入清浄土」（命終わるとき直ちに浄土に生まれよう）という夢告を受けていたからでした。それから10年、与えられた命に終わりが来ようとしているのに、浄土へ生まれる確信は得られていませんでした。

六角堂での百日参籠は、浄土往生をめぐるギリギリの問いをもつてのことであったと思います。

第六回

親鸞聖人のご生涯(3)

藤谷知道

池山栄吉先生

藤谷純子

7月14日午後1時半〜